

アラン・コルバン著『快楽の調和』より(7)

—第7章—

尾河直哉

第七章

ほど良い好色さ

1
医者は、個人が生殖器を十全に機能させることができるように留意しなければならない。生殖器の十全な機能こそ、ルボーによれば、他のすべての機能の「到達であり目的」だからである。^① 医者は生殖器の状態を評価し、生殖器が他の系と、緊密な共感を考えればとりわけ大脳および神経全体と、良好な関係を維持できると保証する必要がある。調和の取れた生殖系の活動を導くために、良い臨床医は、「医者としての直観」を頼りに、まず個人特有の気質を見積もり、次いで、「さまざまな組織体の作用

の力と反作用の力を」^② 評価する。患者がかかわった節欲、性的な過剰、濫用、不首尾などの診断が終わると、今度は、治療方法を考えなければならない。

男性にとっても女性にとっても、こうした行動が原因で引き起こされるすべてのトラブルにたいして、結婚がまず最初の治療法になる。第二の治療法として、医者は、「女性と親しくつき合うこと」をこれに加える。要するに、生殖器の働きが不調に陥ったら、治療目的の性交がせひとも必要になるのである。著しく淫奔な一部の女性は、妊娠によって治療の効果が高まるばあいがあ。動物の雌も、妊娠によって発情が治まらないだろうか？ ラルマン教授によれば、生殖器官の「規則正しい使用」だけが、「有害な習慣」や不随意な精液漏の治療を可能にするという。もちろん

ん、患者が不能を患っていないという条件つきではあるが。さらに、「女性と親しくつき合うこと」が、いかなる症例においても回復を早めるとラルマン教授は言う。

若い女性で手淫を常習とする者、女子色情症の者、寡婦、節欲をしている者にとつて、結婚は特效薬である。「たった一度の性交で女性の過剰な情熱が治まったことは一再ならずある」とデラント医師は書いている。リスフランは一連の障害に悩むひとりの女性を思い浮かべている。「性的欲望が、夜中であろうとおかまいなしに彼女に取り憑き、彼女を責めさいなみ、安眠を許さない。頻度に差こそあれ、たいがいが中途半端でときにはたいへん苦しいエロティックな夢を見て、彼女は疲労する。こうなると、しかるべき用心を十分にしたうえで、夫婦関係を試みるのがどうしても必要になってくる。この関係がうまくゆく可能性はある」。

シヴィアル医師は大方の同業者よりも先を行っていて、自分の能力に疑念を抱いている男性には、女性と親しくつき合う他に、お試し結婚を勧めている。これでおぞましい夜は予防できる。「最も道德的な方法とはいえないが、最も確実な方法である」、とこの専門家は述べている。「あらゆる障害が関係している」⁽⁴⁾のは最初の行為だから、平穩な裡に試みがなされれば、男性が結果を気に病むことは少なくなる。利点はまだある。この移行期間のおかげで、女性も性的な能力とコツを身につけることができるのである。「(1)まで来れば」、あとは「お互いの欲求と相談しながら実

行の日を調整するだけでよい」。これで「結婚を勧めることができる」。結婚が「障害の改善を完璧にしてくれるだろう」。

いずれにせよ、結婚はそれだけでさまざまな病理を治癒する可能性がある。パリのカフェ、ラ・ロトンドでボーイとして働く二十三歳の若者が、胃病ののち、その影響でほぼ不能になった。「勃起が長持ちせず」「射精に達するまえに陰のなかで萎えてしまっていた」。しかも、「消化の最中にも」「臥位を取っているときにも、性交ができなかった」。そこでルポーは結婚を勧め、「家庭で看護してもらえば胃病がどれだけ早く治るか、(心地よい夫婦の床)でなら、いかに性交が楽に行えるか」⁽⁵⁾を理解してもらった。一八五四年、患者は結婚を知らせにやってきた。それ以来、若い夫は事あるごとにこの治療にたいする満足を口にしていく。

結婚が良い治療法にならないばあいがあることも、また事実である。ときには「性的結合に固有の過剰興奮が、著しく有害である(と判明することがある)」⁽⁶⁾。肺結核症や進行した女子色情症のばあいがこれに当たる。病理によってこの治療法が妥当かどうか、医者はじっくり時間をかけて判断を下す。病気の原因が性的過剰にあるばあい、ぜひ症状に応じた休息を取る必要がある。このとき、結婚を勧めるべきか、それとも止めるよう勧告すべきかは症例ごとに変わる。大事なものは「性的機能の行使を」「エネルギーの残り具合」⁽⁷⁾および器官の状態とつねに均衡させることで、

それはひとえに医者による評価にかかっている。

すにで見たように、医者は夫婦の性交を調整するために、性交のリズム、間隔、体位を指示する必要がどうしてもでてくる。一般的な気質や各人の特異気質に沿って過剰になる限度を設定するのが、医者の仕事である。だが、もし完全な治癒を望むのなら、外科手術、整形外科手術、薬局方などに訴えることもできるし、また、生理的・精神的な健康管理だけでなく、単純に力学的な運動を加える方法もぜひ試してみるべきである。それらはいずれも、性的快樂への指向性が多量に薄弱な個人を刺激したり、性的な過剰や濫用に耽っている個人の熱を冷ましたりすることが目的である。

〈夫を刺激する〉

まず最初に、性的活動を刺激する必要のある人々に向けた療法を見てみよう。この療法に外科医が関わることはほとんどない。せいぜい、膣閉塞や包茎の改善のために切開術を行なうときくらいである。一方これにたいし、さまざまな機能障害を整形外科によって緩和する必要があるとき、一部の専門家、なかでも最も優れたモンダ医師は、溢れんばかりの想像力を示している。男性が外傷性障害によってペニスを失ってしまったときには、これを代用品で補わなければならない。陸軍中佐 L. はヴァグラムの戦い

の直後、陰茎の切断を余儀なくされた。ところがこの不幸な中佐は、出兵のわずか数日前に結婚したばかりであった。したがって、帰還した中佐は、「若妻に夫からの貢ぎ物をする必要」「…」を強く感じていた。ここにモンダが登場する。彼は弾性ゴムで「先端が子宮頸部にぶつかり、根本の広い部分が陰茎の切断面に当たるような長さ五プース半（十七センチメートル）の円錐の一種」を中佐のために作らせた。「弾性ゴムの座薬のようなものを直腸に入れ、同時に、会陰部への軽い摩擦があると精囊と射精筋に収縮が起きるようにした」^⑧。L. 夫人はこの器具のおかげで、二度も母親になる幸せを味わった。

モンダ医師は、激しい性交の末に腫瘍になった騎兵隊連隊長 M. D. を手当てした。医師は、ペニスを中に収めることができる弾性ゴムの筒を作らせ、腫瘍を圧縮できるようにした。M. D. は結婚の二年後、「この道具の力を借りなければ夫婦の営みを遂行できなかったが、それでも父親になることができた」^⑨。

逆にペニスが大きすぎるばあいも、モンダと多くの同業者は解決策を見いだしている。十七歳で結婚したド・サン…夫人は、長いあいだ懐妊がなく、性交のたびにひどく苦しんでいた。そこでモンダは、ペニスの長さを短くするために、中央にペニスを通る穴を開けた弾性ゴムの土手を外陰部に装着するよう勧めた。「この補助器具を使って、九ヶ月後、ド・サン…夫人は母親になった」^⑩。またこの臨床医は、ペニスが大きすぎる夫にたいし、半分

だけしか挿入しないように助言することもあった。

モンダはまた、勃起不能の男性やペニスが小さすぎる男性も診ている。彼らのためにモンダが創作した器具は「鬱血器」と呼ばれ、かなりの人気を博した。この器具は、長さ五プースから八プース(一プースは二七・〇セミリ)で筒型の外観を呈している。「片方の端にはなにもついておらず、もう片方の端には吸引ポンプに接続する器具がついている。包皮が陰茎に覆いかぶさらないよう注意してペニスをシリンドラーの中に挿入する。立ったまま、器具を斜め上に持ち上げる。片方の手で鬱血器をセットし、もう片方の手で軽い動きをピストンに伝えながら空気を抜いてゆく。まもなくすると海綿体に全身の血液が少しずつ流入し、ペニスは膨張する。ペニスの勃起感は五分から二十分続くが、その感覚が生殖器全体に影響を及ぼす¹¹⁾」。こうすることによって、勃起を確実に引き起こすことができるのである。しかも、鬱血器を重ねて使うことによって、ペニスの「長さも太さも著しく大きく」なり、筋力もつく。

補助器具のおかげで得られた成功は枚挙にいとまがない。ここでは三例だけで十分だろう。ひとつめは、ルーアンの若者の例で、フロバール医師の診療を受けていた。古典的な治療に加えて鬱血器を十二週間使用した後、若者には手淫にたいする抑えがたい欲望が現れる。二十ヶ月後、ペニスは極めて大きくなっていった。「脊椎は盛り上がり、かつて甲高くてか細かった声は低く太くな

り、ペニスの周囲は毛で覆われ、口には髭が生え、等々¹²⁾。一年前に若者は結婚し、早くも妻は一児をもうけた。彼の勃起は力強いという。「彼は、疲れも知らず、一日おきに性交に励んでいる」。ここでも、医療症例のご多分に漏れず、さながら夢物語である。

二十二歳のある若い理工学校生は、数学の研究に打ち込みすぎたせいでペニスが「細く」、「締まりを失」っていたが、六ヶ月にわたる「勃起訓練¹³⁾」の後、通常の大きさを取り戻した。二十三歳のロシア人、アントワヌ・ド・R伯爵は筋骨逞しい若者だが、それまでに一度も勃起したことがなかった。さて、その彼に婚期が近づいた。ところが、一プースの長さしかない彼の陰茎は、さながら「大きめの小突起」である。「勃起訓練」を八ヶ月続けた結果、彼の生殖器は普通の長さになった。二年間の治療のすえ、「勃起は力強く逞しくなり、性交は欲望も伴って完遂できるようになった。射出される精液も豊かであった。その後伯爵は結婚し、三児を授かった¹⁴⁾」。

一方、トゥルソーは、授業のなかで学生たちにある器具を紹介しているが、彼はこの器具を正当にも、「驚くほど単純」で「奇抜な治療器¹⁵⁾」と名づけ、その後絶えず改良を加えていった。勃起不能になった男性のための器具である。

トゥルソーは一八三五年すでに、結婚を間近に控えて絶対不能に苦しんでいた二十六歳の若者に「わたしが彼のために作らせたある器具を肛門に装着してみるよう」勧めた、と書いている。

「それは検腔鏡の案内具に似た木製の器具で、直腸に挿入したらナプキンで位置を固定する」。二週間後、「男性機能が回復し始めた」。さらに二週間後、若者は結婚できる状態にまでになる。「彼の全面的な信頼を得たわたしは、彼が夫婦の営みを他の人たちと同じように全うできるようになったことを聞き知った¹⁶⁾」。それから、トゥルソーは定期的にこの治療器を使い、たびたび成功を得ている。

トゥルソーは、病院の外科器具を製造しているマティユが考案した最新器具を聴衆に示している。それは「オリーブをひじょうに長く引き伸ばしたような形状をした金属製の詮の一種である」。この詮は、下に向かつて水差しのような形にくびれ、そして「同じ金属でできた平たい軸に溶接されている」。いったん挿入すると、ひと晩中、あるいは昼間のあいだずっと患者から抜けず、「それ以外のやり方で支える必要はない¹⁷⁾」。大きさは個人によって異なり、使い始めて七・八日目から効果が現れることが多い。

ルポーは血液を海綿体に吸い寄せるためにモンダの鬱血器をしばし使っている。彼はまた、極小サイズだが勃起状態になることは可能なペニスの持ち主のために、より簡素な器具も考案した。ペニスが極小サイズだと、前後運動の最中に膣壁から受ける圧力がないため、射精に必要な興奮が奪われてしまう。そこでルポーは、小さすぎるペニスを入れるゴム製の円筒を作った。元々は強

い性交欲を抱く十九歳のある医学生のために作った器具で、この若者に娼婦を相手に実験をさせてみたところ、実験は大成功だった。「この種の交接は完璧に遂行された。すなわち、射精と、それに伴う〈驚くべき官能〉が通常の性的結合と同じように起こったのである¹⁸⁾」。ルポーは、今後可能なかぎり、この器具をつけたとき以外性交しないように助言している。

瘦が原因で射精能力を喪失した者のために、モンダはトゥルソーの編み出した器具によく似た器具を考案した。患者の治療のために、ゾンデと弾性ゴムの利用を勧めている。モンダによれば、ある既婚の騎兵隊長をこれで治療したという。つまりモンダは、「ひと組の夫婦の願いを全面的に叶え¹⁹⁾」たのである。

夫婦の正しい営みを妨げているものが子宮の不正位置によるばあい、ルポーは他の多くの同業者と同じく、子宮を押し戻すためにベッサリーを使用するにとどめている。

幸いなことに、あらゆる不全症の症例において整形外科手術が必要というわけではない。もつとも、おそらくお気づきのよう
に、ここまで引用した事例は貴族や高位軍人、ときには外国人や若い学生のそれである。つまり、だれもかれもが考案された補助器具を手に行けるわけではない。勢い、医者は、古代の健康管理術に忍び込んでいる単純な措置にあれこれ頼って夫婦の性的ポルテージを高め、弛緩した器官を強化するしかない。臨床医はしたがって、それが休眠状態から来ているのか、器官の疲労から来

ているのかあらかじめ把握しておく必要がある。そうすれば、環境(キルクムフサ)にかかわる助言を与え、田舎に行った方が良いとか、新鮮な空気を享受した方が良いとか、患者に助言できようになる。当時の医療言説では、好色さを促す手段として、旅行が繰り返され勧められていた。一七七二年、リニヤックは、十七・八世紀に体系化された新ヒポクラテス派の流れを汲む命令を定式化している。病人は、逗留地の性質だけでなく、その位置や方向にも注意しなければならない。なぜなら、「ヒトの植生に」⁽²⁰⁾より好都合な土地というものがあるからである。方角も重要だ。例えば、東向き町では情熱がより高まる。水質、主たる風向き、季節もまたそれなりの役割を果たしている。いずれにせよ、こうした気がかりは、われわれの対象とする分野にかかわるかぎり、十九世紀に入ると目に見えて影響力を失っていった。もともと、欲望のリズムと快樂の強度にたいする気候変化の影響だけは信じられていた。ミシュレの日記を読めば、こうした事態が納得できる。そこには、フォンテーヌブローやイェールやポルニクでの逗留が、妻アテナイスの冷感症(?)に効果があったと書かれているからである。

運動(ゲスタ)も、慎重に行うかぎり、奨励される。運動は適度に、そして「大空のもとで、とりわけ光を浴び、穏やかな気温のなかで」⁽²¹⁾すべし、とヴィレーは述べている。マルクも意見を同じくする。⁽²²⁾鉄分と硫黄分を含む温泉の強壯作用が体に良いとつ

け加えている。

医者は、食餌療法(インゲスタ)にかんする助言をつねに惜しまない。ミルクをめぐる議論百出である。体を暖めることも、冷やすこともできる万能薬だからだ。ヴィレー、マルク、デランドは牛の乳、ロバの乳、ヒトの母乳を勧める。特に母乳を摂取すれば、それだけで欲望を刺激することができるという。ミルクに賦与された効力は、古代の気質医学の観点から見ると、この液体と精液とのあいだに推測される類似関係ばかりでなく、体から汲み上げられる液体すべてに認められる効能とも調和している。この治療薬は、ワクチン接種した発汗——医者はそれも勧めているが——とも共通点をもつ。とはいっても、サント＝マリー医師は、強壯剤として女性に母乳を摂取させたものの、うまくゆかなかったことを打ち明けている。乳房から直接摂取することを嫌う患者がいたし、また、「自分らに信を置かず、濫用があまりに容易で、利用と濫用があまりに近すぎると考える者もいた」⁽²³⁾。また、「金めあての贅沢な治療と考えられていたこうした治療」に、出費できるだけの経済的余裕がない者もいた。母乳の摂取は、それだけの出費を容易に賄える人たちに任せただけが良いのではないかと、とサント＝マリーは結論し、この高価な治療は、今のところほとんどなされていないと指摘している。

ミルク以外で体を暖める食品を摂取する方法がより一般的だったようだ。そのリストは長い。「興奮性の食品」、「滋養のあるコ

ンソメ・スープ」、「きわめて消化の良いエキス」など、「内臓系を刺激する」働きのある食品である。最も簡便なのが、滋養がとくに豊富だとされる料理で、これには、卵、クリーム、魚、エイヤサメといった「軟骨魚類」、その他の魚の白子や、イカ、牡蠣、タマガイ、タコといった軟体動物が含まれる。とくに寒い季節には、魚は塩分と、リンをとりわけ多く含んでおり、好色さの不足しがちな人には適している。

タマネギ、エシャロット、ネギ、アーティチョーク、キクイモ、ニンジン、アスパラガスやイチジク、カカオ、ピーナッツといった「滋養に富む果実」もまた体を暖めてくれる栄養素を含んでいる。次に来るのがキバナクレンソウ、フランスカブ、カブ、エンドウマメ、ソラマメといった「えぐくて、腹の張る」アブラナ科植物だが、シヨウガ、胡椒、シナモン、クローブ、ナツメグ、サフラン、ローリエ、ペパーミント、マスタード、キンマといった「辛い刺激物」や芳香性スパイスは、それよりもいっそう効能があるようである。キナ皮、サレップ、自宅の庭で取れ、煎じたり粉末にしたりするセイバリー、アイスランドの地衣類、「猫のハーブ」と呼ばれるイヌハッカに同じような効能があるが、このグループは薬局方の限界に位置する。

当時の薬局方は催淫剤を豊富にもっていた。その筆頭がカンタリスで、これが惹起する疼きのために、生殖器を最も効果的に「刺激し」、性的情熱を最も有効に喚起する薬剤であった。とはい

え、カンタリスの惹起する粘膜の燃焼には危険が伴わないわけではない。この「腐食剤」に起因するカタストロフィーについては、多くの観察記録がある。セリニヤックは、アルフォール獣医学学校の二十三歳の学生の例を引用している。彼は、つき合っていた「メッサリナ」⁽²⁾「古代ローマの皇妃。冷酷にして淫奔な女性の代名詞」から「情熱の貢ぎ物をする」⁽²⁾たびにカンタリスの染料を飲まされたため、死にかかったという。

ゴム、油、呑み込むとむかつくような臭いがする樹脂をローションあるいはペッサリーとして使うと、女性のばあい、催淫剤になると書かれている。麝香、竜涎香、霊猫香といった芳香性の物質も同じ効果をもつ。より一般的なものでは、発情期のあらゆる哺乳動物の外陰部から出る体液があるが、これは、男性器の臭いが女性の感覚に訴えるのと同じ効果を、男性にたいして訴えると考えられていた。

残るは、ドロップ、軟膏、ローション、シロップ、マーマレードなど、とくに大道薬売りによって大量に市中に回っていた品々の果てしないリストである。医者はいかに警戒しており、こうした調合薬のなかでも最も広く知られている「ヴェネツィアン・ドロップ」とイタリアからの輸入品と称するすべての娼薬はとくに使用しないよう警告している。ヤクヨウニンジンの根から製した薬だけが医者のお眼鏡に適っていた。周知のように、フロベールは、オリエント旅行への出発間際に、カンタリスのドロップ

プを携帯し忘れないよう気を付けている。

好色さが不足しがちな人たちがすぐに使える機械的な方法、すなわち「物理的な促進法」は多い。まず最も陳腐な例を挙げておこう。車である。車の震動が女性の器官に働きかけると推測されている。マンヴィル・ド・ボンサンによれば、女性の器官はそこから「それまで以上の活力と原動力を受け取る」のだという。

結紮と鍼術に言及されることはめったにないが、その代わり、鞭打ちその他の皮膚鞭打ち療法(体表の一部をたたくマッサージ)は、どの専門家も必ず言及する頼みの綱である。カピュロンは同業者全体に向けて書いた概論のなかでこの療法を推奨している。ルボーが読者に提示しているのは、この分野にかんするまさに図書館ともいべきもので、テラソン神父のような苦痛愛好症(アルゴフィリ)を論じたピク・ド・ラ・ミランドルの著作や、ドレの概論(『愛の物理学あるいは外的性欲促進方法にかんする鞭とその効果についての論攷』、一七八八年)とボワロー神父の『鞭打ち苦行者の歴史』までが含まれている。たしかに、鞭打ちを、「わが国の聖職者が決して手を貸してはならない放蕩のための異常な補助行為(カ)」と見なす医者たちはいらぬ。こうしたお上品な躊躇をもつとせずルボーはこの技術を勧め、自らもいくどとなくその効果を確かめている。ただ、その効果が「本質的に長続きしない」ことを残念がっている。ルボーはこう書く。「一日一回、多くて二回、患者によって腰部であったり臀部であったりするが、五分から十分、

危険のない程度に鞭打ちをさせている。通常、皮膚が赤くなつたら止め、打擲部に血が滲むまでは決してやらせない」。ルボーは陰茎を縛る革ひもやロープをやめ、「金属製のブラシ(B)」を作らせた。「このブラシからは、そこに含まれるさまざまな要素によって、一定量の電流が発生する[「…」普通のハンマーの柄の先に、銅製のきせ金具を取り付け、長さ四・五センチの銅、真鍮、鉄、プラチナ製の針を八十本から百本植えた。柔軟性に富みながらも硬いこの針の自由な先端部分は、使用中に触れ合ったり、絡み合ったりする]」。その一方で、ルボーは娼家における蕁麻疹誘導法を放棄している。これにたいし、ガンヌ医師は、イラクサのみを使うのが適切であると明言している。

これよりも一般的なのが、あらゆる種類のリニメント剤(皮膚にすり込んで使う液状または泥状の製剤)を使ってマッサージしたり摩擦したりする方法である。冷感症のばあい、マッサージは有効である。この治療方法は、ときにきわめて高度に洗練されることがある。例えばサルランジエール医師は、馬の毛を詰めたヘラを自ら開発し、それで叩くマッサージを勧めている。摩擦は塗布剤を用いないこともあれば、用いることもある。塗布剤を用いないばあいは、手のひらかフランネルまたはウールのブラシを用いて行う。塗布剤を用いるばあいは、液体を浸した織物を使う。モンダはこのためにサージを用いている。摩擦する場所は脊柱、会陰部、陰茎基部などで、この方法には「興奮を受けると同時に興奮

作用を促す³⁰⁾働きがある。

熱作用に訴える手段も有効である。単純に患部を日にあてるか、何らかの熱源にさらすだけでもよいが、二十五度から三十五度のお湯に浸けるのも良い。いっそう良いのは、蒸気を浴びることである。トゥルソーは半時間ほどの温浴や座浴を勧めている³¹⁾。カピュロンは、好色さが不足している女性、とりわけ「若い盛りに自然の呼び声に耳を傾けなかった」女性にはこの療法を勧める。器官に「失われていたしなやかさ」³²⁾を回復してくれるからである。こうした女性は、座浴に皮膚軟化温布剤を併用してもよい。ルポーは、生殖器、腰部、会陰部、後頭などに噴霧器を当てて温風³³⁾を吹きかける療法を推奨している。彼はまた、陰囊と陰茎に温めた小袋や布きれを当てる方法も勧めている。

医者のなかには、いささか投げやり気味ではあるが、人や動物の体に触れるという古代からの伝統療法を勧める者もある³⁴⁾。ルポーは不能の患者にきれいな若い女性の間で寝よう助言しているが、これは温熱療法というよりはむしろ催淫療法に近い。

逆説的なことだが、冷たいものに触れるとその後その部分が熱くなり、激しい作用がしばしば起こることを考えれば、冷たいもので情熱の欠如を治療することもできる。海水浴や川での水浴、生殖器、腰部、会陰部を毎朝冷たい水で洗う療法が指示されるのは、以上のような理由による。サント＝マリー医師はかち割り氷をこの場所に当てさせている³⁵⁾。

芥子硬膏（芥子を基調とした罂法や膏薬）もまた、その「特殊な刺激」のゆえに推奨されることがある。リュイエは、女性患者の内生殖器を刺激するために、ペッサリーを使って芥子硬膏を入れていく。ルポーは亜麻と芥子の種子で芥子硬膏を作り、陰茎を引き締めている。彼は患者に、十分から十五分間我慢させる。ルポーによれば、この療法によって陰茎は「大いに役立つ」状態になったという。ただし、この治療を施した後は、交接前に必ず冷水でペニスを冷やすよう助言している³⁶⁾。マルクは芥子泥浴にもふれているが、また会陰部への温布と生殖器の刺激に適したアロマ蒸気をとりにけ支持している。ルポーは、水銀薫蒸によって梅毒患者を治療する要領で、穴の空いた椅子に座る薫蒸を勧めるが、シヴィアルは硫黄ベースの調合薬の方が良いという³⁸⁾。

以上のようにさまざまな治療を羅列してみても、それらが情熱不足と戦うための治療法であることがよく分らないかもしれない。臨床医はたいいてい、これらの治療を組み合わせている。例えばルポーは、生殖器に特化した物理療法に磨きをかけている。彼はまず、毎朝、生殖器と会陰部に冷たいローションを塗るよう助言し、次いで、彼が調合を教える「刺激剤」を使って、性交の一・二時間前に最低十分間会陰部と陰茎基部を摩擦するよう男性に指示する。そのうえで、患者は局部にアロマ薫蒸を行ないながら、接物と「好色な愛撫」を受けることになる。この加療を可能にするためには、患者は裸のまま穴を開けた椅子か肘掛け椅子に浅く

座り、「骨盤を覆うカバーで腰部をきつく締め」なければならぬ。その後、火鉢が「生殖器のすぐ下に置かれる」。

この加療が終わると、いよいよ男性は「性交の試練に臨む」ことができる。だが、せっかく生じた勃起を維持するため、保護カバーを外さず、胴回りでぎゅっと締めつけたまま、あらかじめ温めておいたベッドで交接を行「わなければならぬ。性的な熱が冷めないようにするために、「とくに最初のうちは、ある程度急いで性交まで持っていかなければならない」⁽³⁹⁾。こうした医師の指示全体が、「はかない勃起」⁽⁴⁰⁾のためのテクニク、とルポーが名づけたものにあたる。

モンダは、ある国の王宮に近い行政官で、妻の処女を奪うことができない男性を治療している。「わたしは患者に、読書と職業上の雑用からすっかり離れて、狩りや乗馬や庭仕事のような手仕事に打ち込んでみるよう勧め「…」アンチ無性欲症リニメント剤で尻の内側を毎日擦ってもらい、徐々にリニメント剤の量を増やしていった。朝と晩に、香草の浸出液や「…」アステラジック〔キタ科シオン属の植物アスターから調和された〕軟膏で生殖器をマッサージし、性器と腰回りにバレージュ〔ピレネー山脈中部の温泉地〕の鉱泉を浴びてもらった。治療は二ヶ月半続いた。「M氏は(そこでついに)夫婦の行為を完遂でき、渴望していた成果を手中に収めたのである」⁽⁴¹⁾。

四十五歳のさるポーランド貴人は、若いときに耽っていた乱れ

た性行為が原因で、十年前から不能に陥っていた。モンダは、何人かの友人とともに田舎の小さな家に六ヶ月間隠るよう彼に要求した。アンチ無性欲症シロップを処方し、アンチ無性欲症リニメント剤を使ってマッサージを行い、竜涎香のチンキ剤とオリエンタルローズのエッセンスオイルが入ったアステラジック・コルセット⁽⁴²⁾を昼も夜も装着するよう指示した。続いて、男を逗留のためニースに送り出す。その後このポーランド人は結婚し、三人の子の父親になった。

ある若者の不能が結婚初夜に判明した。「彼の想像力は官能的なイメージでいっぱいなのに、性行為に及ぼうとすると勃起不能になるのである」。モンダは、腰部をアステラジック剤でマッサージし、沐浴を行って、しばらく芥子泥に足を浸けたのち、今度は、鬱血器を使用するよう指示した。ペニスは勃起できる状態にまでなった。「勃起が弱いときにはスプーン数杯のアンチ無性欲症シロップを摂るだけで、勃起は完全になった」⁽⁴³⁾。

医者が勧める治療は、ときに、あまりにもありふれていることがある。例えば、男性が早漏で悩んでいるばあい、「同衾のままに」風呂に浸かるようマンヴェイル・ド・ボンサンは助言している⁽⁴⁴⁾。しかし、治療の面目を一新するような新たな療法もある。その筆頭に挙げられるのが、デュシエンヌ・ド・ブローニユが成功を収めた一連の電気療法である。精囊と射精管と尿道を刺激するため深部にまで治療作用を及ぼしたいと思っていたルポーは、電気が

使えることを大いに信じ、接触や磁気スパークや誘導によってそれが得られると考えた。⁴⁵例えばマザールは、手淫や女性との性交過剰によって不能になった患者に電気を流し、治療に成功している。彼は「会陰部、脊髄、仙骨に電氣的な摩擦を起こすことで、これらの部位からスパークを引き出した」⁴⁶のである。

十八世紀末にはすでに、グレアムがロンドンに開設した『健康の殿堂』で、休眠状態の器官を覚醒させ、それだけで性の悦びを喚起できる電気ベッドを使っている。ペルシヤ絨毯が敷き詰められ、官能的な絵画が飾られた豪華なマンシヨンのなかに電磁気ベッドが設えられ、音楽と芳香が漂うなか、夫婦はそのベッドを褥にすることができるといふ。「これらのベッドは水晶の脚で支えられ、青い房飾りのついた紫色の繻子に覆われ(ていた)」。隣部屋には天なる火を発生する機械が置かれていて、外からは見えないう導体がベッドの上まで引かれている。このベッドに横になった人は、生気を与える炎に抱かれているような感じがし、どんなにそつけない女性、どんなに冷たい女性でも、欲望を駆り立てられて思わず身震い⁴⁷し、不能の人も本来の活力を取り戻すのである。この魔法の褥こそ、紛れもない「結婚の祭壇」だと考えられよう。ペルトロン医師は、この方法の有効性を信じていた。例えば医師の知り合いのカップルは、寝室の隣室に据えられた機械を使ってベッドに電気を通している。⁴⁸

残るのは、つらいことの多い感応電流療法である。トゥルソー

がこの療法を指示するときには、したがって、慎重に慎重を重ねている。⁴⁹この感応電流療法は直腸に放電叉を入れて行われ、通常、射精を引き起こす。

以上の諸治療が行われるときには必ず心の療法が伴っていた。器官に持続的な活気を与えるためには、この心の療法がじつは不可欠なのである。シヴィアルがまず「患者を取り巻く気がかりの種を消し去り」⁵⁰、自分は不能だという強固な思い込みを打破するよう指導していたことはすでに見た。最悪のばあい、医者は患者に、徐々に諦める勇気をもたせることも必要になるだろう。シヴィアルによれば、ことこの件にかんしては、どの患者もその人特有の用心が必要になるといふ。「生殖にかかわる完全な倒錯」のばあい、肉体的な被刺激性を治療しても無駄だとルポーは言う。このような病には、心の治療しか対応できないからである。

ある男性が、一八四八年二月の革命直後、ロンドンで贅沢な暮らしをしている愛人を追いかけて出て行った妻と別れ、それ以来、不能に陥ってしまった。男性に好意を抱いていた若い未亡人と行為に及ぼうとすると、そのたびに最初の妻の記憶が蘇ってきて、男性の性器は凍り付いてしまう。そこで男性はルポーの診察を受けた。ルポーは男性の機能を回復できたが、かつて妻のものだった品々を目にしたたり、妻と交わした愛撫を思い出したりすると、それだけで再び不能に陥ってしまった。⁵¹そこで男性は医師の指示に従い、逃げた妻と暮らした部屋や、とくに同衾したベッド

では決して愛人と寝ないようにしている。⁽⁵²⁾

ビネがフェイテシズムの概念を世に知らしめるには一八九〇年まで待たねばならないが、ルポーは一八五〇年すでに、十九世紀末に見取り図が描かれることになるこの病的枠組みに入る患者を診察している。第一帝政のとある將軍の息子M. X. は父親の城館で育てられた。その城館で、彼は十四歳のとき、両親の友人である「若い貴婦人」から「愛の悦び」の手ほどきを受ける。このとき貴婦人は二十四歳。見事な金髪をイギリス風、つまり「渦巻き毛」にして結い上げていた。隠密に交接しなければならぬため、彼女は愛人と関係を持つときにはいつも「昼間の服装で、つまり編み上げ靴を履いて、コルセットを締め、シルクのドレスを着て」⁽⁵³⁾いなければならなかった。

若者は、この「早すぎる快樂」が原因で重い病気になったが、十八歳で士官学校に入学する。ある種の女性にたいして、特殊な状況でしか「性的欲望が起こらない」ことに気づいたのはそのころである。パートナーが寝巻きを着ているだけで性的な熱は冷えてしまう。相手の女性は金髪で、それをイギリス風に結い上げ、編み上げ靴を履いて、コルセットで胸を締め、シルクのドレスを着ていなければだめだった。しかも、愛も感情もない行為にしか反応できなかったのである。この不幸な男性は、家族から結婚を勧められても頑なに拒んでいた。「ネグリジェを着た妻と夫婦の床で性交などできない」⁽⁵⁴⁾からである。ちなみに、この男性は頑健

な体つきで、しかも、情熱的でエネルギーシユな性交ができるという。

一八五二年、受診に訪れたこの男性に、ルポーは二つのタイプの治療を組み合わせている。コルセットをしていない褐色の髪の毛と性交に及ぶさいには、その二時間前にカンタリスとリンを含む水剤を飲むように指示した。二回目の挑戦で、それが功を奏する。六ヶ月のあいだは、事前に水剤を服用しないかぎり性行為は不可能だったが、その後、この若者は、事前の服用なしで、コルセットをしていない褐色の髪の毛の女性と「交接」できるようになった。このように難しい症例のばあい、医者は患者の愛人や妻の合意を得たうえで本人に働きかけることが望ましいとルポーは考えている。⁽⁵⁵⁾

アリベールもまた赫々たる成功を収めている。患者は芸術家で、男性の理想的な姿形を思い浮かべただけで勃起し射精していた。アリベールはこの芸術家に女性の理想的な姿形を深く追究するよう指示した。⁽⁵⁶⁾このような「倒錯」と心の刺激への言及は十九世紀中葉に起こっており、これが十九世紀後半の世界を、医療の表象と論理の革新を基礎にした別世界へ持ち込むようになることはご理解いただだけよう。

ともあれ、夫婦の心に訴える療法に話を戻すとしよう。ルポーは説得に賭けている。パートナー間における「性交失敗」のケースでは、医者はなによりもまず、自分の治療法は有効で、かな

らず治療できる旨を確言し、発言に揺るぎない自信を見せなければならぬ。不能はたいてい「生殖器の性交エネルギーにかなする誤解」から生じており、それが苦悩を生む。キナ皮とサフランを飲ませても効果のなかつた二人の夫を診ていたアメデ・ラトゥール医師は、しばらく海水浴に行くよう指示し、逗留のあいだにはきつと恢復するはずだと太鼓判を押している。⁽⁵⁸⁾

たんなる生殖器の疲労であれば、臨床医は逆療法を取るだろう。体を休め、節欲し、精神を静かに保つて、性的活動と想像力を呼び戻す可能性のあるものごとく遠ざけるよう指導するに違いない。一方、生まれつき性的情熱が薄弱なばあい、医者知的な刺激に訴え、エロティックな著作を読んだり、扇情的な絵をゆつくり見たり、舞踏会に参加したり、観劇したり、「女性たち」とりわけ遠慮があまり要らず、あるていど性的な話が自由にできる類の女性たちとつき合う」ことを勧める。ただし、こうした女性のばあい、嫌悪を催させない程度の女性であることが条件である。すでにヴェレーは、恋を描いた本を読んだり、恋を囁き合ったりすることを推奨している。ただし、それに「没頭しすぎ」ないうよう注意しなければいけないと言う。性的失敗が起きる危険が出てくるからである。マルクもまた官能的な絵画や、エロティックな作品を読むよう勧めているが、これらに加えて、音楽が「生殖器の被刺激性」に及ぼす影響力の強さを力説している。マルクは、シヨムトン医師のように、裸体を眺める効果にいつそうの期

待を寄せている。裸体を眺めていると、「どんなに優しい愛撫をもつてしても興奮させることができなかつた器官にも活力が与えられる」⁽⁵⁹⁾。かつてテイペリウスが裸の美女に傳かれていたのはそのためであつた。この種の療法は好色さが不足した女性にも応用できる、とルポーは考える。「舞踏会、観劇、男性との社交が必要な女性もいれば、詩や小説を読んだり、独りで美術作品を鑑賞することが必要な女性もいるだろう。また自然を眺めることが必要な女性もいれば」、田園の魅力や旅が必要な人もいるにちがいない。

〈熱すぎる人を「冷ます」〉

医者にはまた、熱くなりすぎた欲望を「冷まし」、緩和し、鎮め、性的過剰や濫用を治療する任務もある。シヴィアルによれば、それは、興奮を引き起こす任務よりはるかに難しい。手淫や激しすぎる性交を止めさせるのは、絶望的な試みであることがきわめて多い。現実を悟つたこの臨床医はこう書いている。「孤独な快樂の習慣があまりに抗しがたく、結婚もこれを断ち切れなかつた若い女性をわたしは二人知つている。そのうちの一人は、せっかく才能を育んできた画道を諦めざるを得なくなつた。制作中もその悲しい性癖に打ち克つことができなかつたからである」⁽⁶⁰⁾。女性がひとたび女友たちと陰核勃起に耽る習慣を身につけると、治

癒はしばしば絶望的である。

女性の性的情熱を緩和するとき、医者には食餌療法や生活習慣に働きかけ、古代の薬局方を使う必要があることはもちろんだが、それ以上に監視や、さらには強制権の発動にまで及び、社会環境に合わせた心の治療に訴える。性的過剰や濫用によって惹起される個人の荒廃にたいする天罰、独りで、夫婦で、あるいは集団で耽るこうした放蕩にたいする天罰は、不調な性的情熱をただ蘇生させるためだけのばあいよりも広範な療法が不可欠になってくる。監視や強制権の発動とはいっても、医学的言説のなかでは、真に懲罰的な企図が随伴するわけではない。臨床医は情報を与え、予防し、治療するために存在するのであって、罰するために存在するわけではないからである。手淫の脅威がその強い影響力を発揮する裏には、こうした事情が存在する。欲望の濫用にたいする闘いとなると、若い男女が医者の主ターゲットになる。ただし、忘れないようにしよう。医者の多くが、女性の過剰な好色さを不妊の原因と考えていたのであった。そこから、常軌を逸した夫婦の房事にたいする闘いも避けて通ることはできない。

患者が若い娘のばあい、臨床医が私生活の中心に介入するためには、母親のサポートがぜひとも必要になる。悪習を予感させる徴候が、若い患者に向けられた臨床医の眼差しをもってしても看破できる段階に達していないとき、それらをまず監視し、探り出し、看破するのは母親の仕事である。娘の様子がどことなくこ

ちなく、どぎまぎしたり困惑したりしているとき、孤独を求めたり「結婚にたいして距離を」感じているようなとき、注意深い母親なら、娘に孤独な快樂の実践を疑うだろう。痩せたり、急にいらいらしたり、斜視が現れたり、歯が欠けるほど頻繁に歯ぎしりをしていたら、病気の明かな証拠である。眠っている若い娘の様子を見に行くべきだ。ベッドに染み出すまでびっしょり汗をかいていたなら、もう疑いを容れない。⁶⁵

そうなると、母親は「優しく論じたり」、理責めで追ったり、感情に訴えたり、懇願したりしなければならぬ。手淫は、やがてやってくる性交の官能と将来母親になる欲びを危険にさらすことになることは間違いない。そう母親は力説するだろう。ルポーターは、このようなやり方がときに良い結果を生むことを指摘している。⁶⁶ しかも、母娘を結ぶ愛情に訴えることができれば、有益である。こうした情に訴える作戦がうまくゆかないばあい、母親は罪深い娘を寝かしつけることも厭わず、日中は一瞬たりとも娘から目を離さないようにする必要がある。想像力と官能が「結託して美德に逆らう」⁶⁷のを感じたら、娘は急いで母親の許に駆けつけ、助けを求めるようロジエ医師は忠告している。そのうえ、娘は、欲望を満たすのにあまりに好都合な「部屋や、あらゆる奥まった場所」を避けなければならない。また、人通りの少ない「自然の逃げ場」は避ける必要があるだろう。ただこうなると、この療法は、エロティック文学を地で行っているようなものである。

患者が少年のばあい、より正確に言えば、思春期直前の少年のばあい、医者への関心は私的な生活領域の外へと向く。犠牲者が集団で暮らす中学校その他の場所を注視するのである。ここでは、譴責や強制がより強固に行われる。とりわけベッド、便所、教室が専門医の標的になる。専門医は共同ベッドどころか相部屋さえ禁止し、明るく、カーテンのない寮にするよう求めている。そのうえで、若者が両手を上掛けの上に出して静かにしているか舎監が見張り、教師が「抜き打ちで」「無言の検査⁶⁵」を行うことになる。

彼らはまた、寮生たちがひとりで「秘密の場所」に潜り込んで長いあいだそこから出てこないことのないよう監視しなければならぬ。また、そうした場所を明るくしておくことも欠かせない。より一般的に言うなら、若者が、いかなる場所であれ、身を隠すことを阻止する必要がある。教室では、どんなに静かに過剰行為を行っていても、疑惑を生じさせないわけにはゆかない。教師は、授業中、生徒たちを「頭の先から足の出来まで」怠りなくつねに監視をできなければならない。ドゥッサン⁷⁰デュブルイユ医師は、机には陽の光が当たるようにし、椅子の背もたれは簡単な横木を渡したものにしよう求めている。「人目を盗もうという気配を見せたり、あまりに静かすぎたり、こちらを見つめていなくてもないのに目が据わっていたり、本のあいだに顔を埋めたり、その他あれこれこそやってたら、教師はすぐに強い不安を感じなければならない⁷¹」とドゥッサン⁷⁰デュブルイユは書いて

いる。生徒の表情が「引きつったり」、目が「ららんと輝いたり、逆に目を失ったりしたら、学業とまったく無縁な何かが起こったことはほぼ間違いない」。そうになると、教師は問いつめて自分を引き出す必要が出てくるが、それらはすべて極秘で行い、決して学校内で行ってはならない。教室に戻った生徒は学監のすぐそばに座らせられ、「書き方の練習をたくさん⁷²」やらされる。ここでは教師と聴罪司祭がいかなる関係にあるか、ご理解いただけると思う。

若者の監視がぜひ必要だとするルソーの命令に応えるかたちで、ドイツの教育者の一群が、自らの権威を強固にするために手淫にたいする闘いを利用した。たしかに、性的行動が全体的な行動と精神的な特徴を反映しているというテーマを論じるときに、まずもって例として挙げられるのがオナニストである。宗教的な罪であると同時に病氣とされていたものとの闘いは、教育学がその固有分野を確立しようとしていたこのとき、とりわけドイツにおいて、教育に認められていた高い価値を強化する働きがあった。繊維状組織と神経に認められる重要性を考慮するようになったその結果、身体が以前よりも脆弱なものとして立ち現れ、自己の保健衛生と感情の分析をより深く、より完璧なものにしよという動きが出てきて、教育学者たちは、乳母、里親、家政婦、家庭教師、さらには聴罪司祭を批判するために、孤独な悪習を糾弾するキャンペーンを足がかりにすることができたのである。とはいえ、フ

ランスでは、こうした展開はドイツほど明瞭ではなかったようである。

欲望を抑えられないところまで行くと、強制権の発動が避けられなくなる。たいていが納得づくであるだけに、なおさら発動は避け難かった。こうなると、女子の手淫常習者のように、男子の手淫常習者も夜間に見張られる可能性がでてくる。孤独な快樂にも、不随意の精液漏にも注意が必要になるからである。ドゥッサン・デュブルイユ医師は、猥褻な想念で頭がいっぱいで、欲望に打ち克つことができないある若者を治療している。キナ皮とミルクと運動はまったく効を奏さなかった。患者は、まず就寝前に両手を縛ってみた。無駄であった。オーステンデの湯治も、スパの水も、旅行も効果なし。「今は、夜のあいだ、自分で自分を見張っています」と患者は書いている。「二・三時間しか眠りません。それ以上眠ると遺精の心配があるからです。そこで、起きあがり、少し歩いています」⁽⁷⁾。掛け布団がわたしのあそこに触れないよう、下腹部に木製の輪を載せています⁽⁸⁾。

この不幸な患者は、断末魔の苦しみを四十八時間嘗めたあとに逝去する。彼は「生涯の最後の数年間、勇敢にも、夜のあいだ、椅子に座り、首輪をはめ、両手をそれぞれの側に置いた椅子に縛り付けていた」と、最後にドゥッサン・デュブルイユは書いている。患者を監視していた兄によれば、患者は縛っていた紐を引きちぎってまで「性器に手をもってゆく」⁽⁹⁾ことがあったという。

テイソの系譜を思わせるこうした描写は、性的快樂にたいする欲望がいかに抑えがたく、その暴力を緩和することがいかに難しいと医者たちが考えていたか、あますところなく伝えている。手淫と不随意の精液漏と不能のあいだを知らぬまに移動したり、さらにはそれらをごっちゃにしているところから、三者の纏れをほとんどこうとする者がぶつかかる困難のほどが偲ばれる文章である。それはまた、今日、不幸なアミエルの置かれていた状況を理解しようとする文学史家の困難でもあった。

固有の意味の手淫を阻止するために考案された器具はじつにおびただしい。フリーリップ・アリエスの有名な論文が発表されて以来、それらの器具の描写は、歴史家の著作においてむしろ月並みなテーマになった。ロジエ、デランド、ラルマンをはじめとする当時の専門家たちもすでに、嬉々として器具を列挙している。若い娘にかんして、他の治療法がすべて暗礁に乗り上げたときには、「産着や矯正肌着、またはブラシのように短く切った馬のたてがみをすべての袖口と端に縫いつけたアンダーシャツなどを着せるという方法に頼っている」とロジエは書いている。「炎症を起こしている患部には、この疾患のために考案されたバンドをする⁽¹⁰⁾」。一八二七年、シモン医師は、両手をベッドの柵に括りつけるといふ実に単純なやり方を勧めている。デランドはこの方法をさらに精密化し、手ばかりでなく足も括るようにさせた。背中を閉じ、袖が交差して腕が胸の上に来るようにしたキャミソールも推奨し

ている。彼はまた、両太腿が触れることを阻止するさまざまな器具を使うよう指示している。両太腿の内側に貼り付けるコルク製の板。「先端が松葉杖のように二股に分かれた木の棒」。後ろに開口部のあるパンツ^{②6}。銀やブリキなどの金属製の薄板ででき、包帯製造会社が商品化した反オナニーバンドなどがそれである。女子用の反オナニーバンドは三角の形をしており、男子用に製造された反オナニーバンドには陰茎と陰囊を象った部分がついている。パヴェ・ド・クルテューは「体よりも長いネグリジェを着て、足の先を中通し紐で結ぶ^{②7}」ことを提案しているが、デランドはこの方法の効果にたいして疑念を抱いている。残念ながら、デランドが言うように、中学校でこうした器具を使うことはほとんどできなかった。衛生管理が難しく、これらの器具はかえって性器を加熱、刺激、加湿してしまう危険があるからである。

シヴィアルがなによりもその効果を信頼しているのは、尿道に固定し、患者に引き抜けないようにしたゾンデである。^{②8} 欲望を衰弱させるもっと穏やかな方法もある。デランドは、陰囊に水や蛭をあてたり、冷たいパップ剤を貼ったりする方法を指示している。一八四五年、ラスパーユは樟脳入りのパンツを使うか、やはり樟脳の粉末を大量に撒いた層で性器を覆う方法を勧めている。樟脳の粉末層はマットレスとシーツの間に敷くと良いとラスパーユは言う。

一八四二年、ラルマン教授は二十五歳の患者の症例を発表して

いる。宗教的なためらいから、この若者は手を生殖器にもつてゆくこともなく、女性との関係も最小限にとどまっていた。ところが、陰茎の抑えがたい欲望が夜中に勃起を引き起こし、意志に反して手淫をするようになった。患者はそれを阻止するために最初両手を縛ったが、「夢を見ながら寝返りを打ち、ベッドに擦りつけて痙攣を得るようになった。ついに彼は、昼間にその痕跡がくつきり残るほど、〈数年にわたって〉毎晩、自らの両手両脚をきつく縛った」。それにもかかわらず、一晩に二回から三回精液が漏れる。「陰茎と陰囊の感受性は、少し触れただけでも癩癩様の痙攣が起こるくらいに高まっていた^{②9}」。ラルマンは陰茎包皮を切除する。治療には二週間とかからなかった。奇蹟の治療を成し遂げたこの専門医の果てしない著作には、長い殉教史が繰り広げられており、ここに挙げた症例はそのささやかな一例に過ぎない。

さる高名な医師の息子 M. D. は八歳のとき陰茎にコートハンガーを這わせていて自慰の歓びを発見した。この致命的な発見には、あるお針子の姿形の記憶が結びついていたが、それから三年後のある夏の日、ほとんど素っ裸でベッドに横たわっていたときにその記憶がふとよみがえってきて、それ以来この男の子は「怒り狂ったように^{③0}」手淫に耽るようになった。やがて成人したラルマンのこの患者は、孤独な悪習から逃れようとした。いかなる摩擦も回避するため、彼はいちばん硬いベッドに下着も着ずに寝て、上掛けは一枚だけにし、それも直接触れないように下に輪を入れ、

両腕を持ち上げて頭の後ろで組むようにした。使用人が夜、寝ている彼を見回って、もし体の位置がずれていたら起こすように命じていた。

患者は起きると、袖無しの鎖帷子——重さは二十二リーヴル(二リーヴルは五〇〇グラム)ある——を直接肌の上に羽織った。「古代の騎士が着ていたような」鎖帷子で、性器を収めるための「銀製の受け皿」が下部に付いている。この鎖帷子には、両腕と両太腿のための計四箇所しか開口部がなく、脱ぐときのために前面にスリットが入っていて、そこを閉じるときには「コルセットの紐の要領で強力な鎖を鳩目に通す」。鎖の最後の輪を南京錠が封じ、鎖帷子をひとたび閉じたら、鍵を使用人が預かり、いかなる口実を聞かされても鍵を主人に渡さないよう命じられた。こうして性器は「完全に閉じこめられ」、尿を排出する小さな開口部しか存在しなかった。「患者は、念には念を入れ、少しでも勃起が起こつたらそれに直接対抗するために、正中線に沿って内向きに針の先端部分を四つ溶接させていた」。睾丸と精索とその周辺がしじゅう炎症を起こしていたにもかかわらず、九十年前から患者はこの帷子を着ていた。南京錠をヤスリで擦り切ったことはいくどもある。「猛り狂ったように、自らの暴力に抗う帷子を」叩くこともしばしばだった。

ラルマンはさらにもうひとつ、勃起が起こつたさいに苦痛を与えることを目的とした名高い器具を描写している。それはペニス

を容れるチューブで、内部は綿や羊毛の層で覆われているが、そこに細い針が隠れており、「陰茎が膨張して」針を覆っている「柔らかな層を押し戻すと」⁽⁴⁾針が皮膚を刺すという仕組みである。ラルマンはこの器具の評価にためらいを見せている。ひっきりなしに勃起を引き起こし、したがって逆説的なことに、勃起を促してしまうというのである。ラルマンは、これにとどまらず、あらゆる道具とバンドに明らかな懐疑を示しており、この先、手淫恐怖症が、きわめて緩慢とはいえ、確実に衰退してゆくことを予想させてくれる。

お気づきになられたように、ここまでの症例はすべて強制権の発動というよりも自己束縛固定である。デランドが言及している若い娘は、自ら両親のところへ出向いて手淫を告白し、毎晩、自分を束縛固定してくれと頼んでいる。その後、夜が来ると「彼女は父親に念押しをし、外れないように紐の縛り方を自ら指示したが、たまたまうまくすり抜けてしまったときには、自分から父親に知らせに行っていた」⁽⁵⁾。臨床医は無遠慮にも、私生活のまっただなかにわれわれを導き入れ、父と娘のあいだにどんなに誠実で感動的な関係があるか教えようとしている。

万策尽きたときに残っているのが、外科手術である。クリトリスが異常に大きかったり、クリトリスが手淫や女性同性愛の欲望を惹起しているばあい、その切除を口にする著者は多い。たしかにこの手術は行われていたが、その数はきわめて希であった。し

かも、フランスでは、イギリスほど不安も議論も醸すことはなかった。一例を挙げれば十分であろう。一八二二年、ペルタンとデュボワは、結婚してから何年も経っているのに手淫をやめられずにいた二十八歳の若い女性のクリトリスを切除することに決める。この医者たちによると、切除の効果は靨面だった。衰弱の淵にあった患者は、澁刺とした健康を取り戻し、母親になる喜びを知ったという。⁽⁸⁾

卵巢の切除となると、これに比べて医者たちのためらいは大きい。すでに見たように、娘の淫奔さにうんざりして、それを緩和しようとして、この貴重な器官を彼女から取り除いてしまった去勢師の症例を、デランドは嫌悪感をもって引用している。一方、われわれがここまで読んできた著作の著者たちは、過剰な好色を阻止するための睾丸切除も推奨していない。こうした器官が失われれば子どもが産めなくなるわけだから、彼らの目から見れば、クリトリスの比ではないのだろう。とはいえ、デランドも、彼の同業者のいくにかのように、失われた落ち着きを取り戻したい一部の患者から去勢を頼まれることがあったと言う。宦官になる危険を覚悟のうえで「オナニー症患者」の精管や精巣動脈を結紮することを勧めているのは、シモン・ド・メスはただひとりである。それゆえ、男性にたいして行われる手術は、手淫や不随意の精液漏の原因である欲求を解消するための包皮切除だけであった。とはいえ、希ではあったがペニスの結紮があったし、言うまでもな

く、尿道の焼灼術が、とりわけラルマン教授によって何十年にもわたり行われていたことを忘れてはいけない。

運が良ければ、健康管理だけでも過剰な欲望の突発を治癒、少なくとも予防できる。医者はこうした健康管理にかんする療法の一覧を長々と展開しているが、それらはときに性的情熱を刺激するための療法とよく似ている。例えば、新鮮で乾いた山の空気は、場合によっては、冷感症を加熱することも、性的情熱を冷やすこともある。

医者はベッドの危険という強迫観念に取り憑かれており、穏やかで体力を回復してくれる睡眠を保証しなければならぬ床について、長々と議論を展開している。孤独な快樂から身を守る楯としてベッド以上に良いものはない。危機にある若い女性たちにかんじてロジエはこう書いている。彼女たちのベッドは「耐えうるかぎり硬く、馬糞織で織られた部分がほぼ直接体に触れるようにし、その他の部分は藁にすべきである。頻繁に場所を移して有害な熱を避けられるよう、きわめて広いことが求められる」⁽⁹⁾。この臨床医は、「医者たちが好んで口にする警句のひとつをここで発している。「爽やかな床は人を丈夫にし、熱い床は人を苛立たせる」⁽¹⁰⁾。しかも、「この種の患者はとりわけ、できるだけベッドに寝ていてはいけない」。

男性を診察しているラルマンは、いつそう細かい指示を与え、性的興奮をそそるグレアムのベッドに設置すべき医療器具さえ考

案している。「ベッドは硬くなければだめである。ポトムとシーツの間には皮革もしくは織引きの麻布を敷くのが良い」。もしそれでも不十分で、自慰者が手業をやめなかつたり、夜間遺精が止まらないばあいには、「腰部に鉛の板を当てさせるが、この板にコルクの切れ端やきわめて軽い木片を取り付けられればさらに良い。こうすれば、どんなに睡眠が深くとも、体が仰向けになることは絶対でない「…」この器具が発する少しの熱も、麻布のベルトに固定した鉛の板が防いでくれる。しかも、効果をいっそう確実にするためには、ベルトを脇腹に固定してもよい。この位置に取り付けければ腰部を熱することがない⁽⁸⁸⁾」。なによりもまず避けるべきだとされていた姿勢が背面臥位——つまり仰向けの姿勢——であることにお気づきになったと思う。当時、この姿勢は勃起を促すとされていたからである。子供用の椅子に注意深く座り、眠らずにいることを勧める医者もいた。そのさい、ロンドは座が藁か木の椅子を、重症のばあいには石か大理石の長椅子を奨励している。

性的情熱を一時的に鎮める最も簡単な方法が冷水浴と冷水シャワーであることは言うまでもない。カピュロンは、官能が強く、生殖器があまりに硬くなってしまう夫婦には、「緩和性の(皮膚を柔らかくする)風呂から出たときにしか会わないよう」勧めている。シャリース、ロジエ、デランドは好色な若い女性は二十度から二十五度のぬるま湯に浸かり、思慮分別のある人にいつも傍ら

にいてもらうよう助言している⁽⁸⁹⁾。

あまりに激しい欲望に襲われる人は、閑な時間を回避し、つねに何かをやっていないなければならない。それにはウォーキング、ジョギング、跳躍、球技、バドミントン、石投げ遊び、ビリヤードなどが良いとされる。とはいえ、「生殖器を擦るような動きを含む」運動はすべて御法度である。それらは、フリードランダーが『男性の身体教育』という概論(一八一五年)のなかですでに禁じている。その概論で彼は、例えば少女に揺り木馬を禁じ、少年に階段の手すりを跨って滑り降りたり、滑らかなロープを使ったりすることを禁じている。オーギュスト・ドゥペーは一八四八年に刊行されたその著書『結婚の健康と生理』のなかで、床に就く前には、疲れるまで井戸の水を汲み上げるとか、コーヒー豆を挽くとか、ロープを巻き上げるなどの運動をする方がよいと若い男性に助言している。一八五五年には、クロムランクがその著書『社交会の人士のための人類学概論』のなかで、これと同じ目的のために、平行棒を部屋に設置することを勧めている。

体力のない若い女性は、平行棒のような遊びの代わりに、シーソーやぶらんこを使ったり、「船乗り」をしったりしてもよいとされている。例えばロジエは、未婚女性に水上散歩を勧め、「軽量ボート」漕ぎを習ってもらいたいと書いている。これと同じ観点から、ラルマンは体育館の充実を要求する。以後一世紀以上にわたって、運動とスポーツは、性道徳を保障する最良の手段と見な

され続けることになる。「土地に明るく、風紀のしつかりした案内役」が付くという条件が満たされるかぎり、旅行もまた好色の過剰には良い治療法である。

仕事も、それが毎日の、規則正しい、節度ある「穏やかな習慣」になっているかぎり、貴重な楯になってくれる。若い女性なら刺繍、ブーケ作り、服の「直し」なども良いだろう。

好色過剰を自覚している——あるいは好色過剰と指摘された——個人に勧める食品は、火照りを鎮め、性欲を抑えるもの、少なくとも「緩和作用のある」ものをベースにしなければならない。

この人たちに欠かすことができない食品は、野菜や甘い果物、若鶏、子牛、子羊といった加熱すると白くなる肉、ブイヨン、ティンがすでに勧めていたバターミルク、牛乳などだが、牛乳はミネラルウォーターか、必要に応じて、当時特効薬と見なされていた母乳で割る必要がある。一方、家禽類、魚、「貝類」、マスタードは御法度。飲料として適しているのは、水、軽く煎じたお茶、果汁だけである。

スイレンは、〈*assafœtida*〉〔樟腦〕および、灌木から抽出されるかの有名な〈*agnus cactus*〉〔セイヨウニンジンボク〕とともに性欲減退薬の主力で、修道院の尼僧に性欲が生じたとき、それを和らげるためにシロップにして与えられていたが、効果のほどには異論が多かった。著者によつては、これにアンモニア水の入ったゴムと樟腦を加える者がある。これらよりも厳密な意味で薬局方

に属するいくつかの製品もまた、欲望を和らげるものであるかぎり、推薦されている。調査された硝石と鉛がその例だが、シヴィアルは、母乳とともに特効薬と見なされていた含鉄鉱泉と併せて、これらの調合薬に反対している。欲望を和らげる薬局方は、無性欲症治療のための薬局方に比べて著しく限られていた。おそらく、自らを欲望過剰の犠牲者だと感じる男女よりも、自らに性的刺激を与えたいと思う患者の数が上回っていたからだろう。前者は依然として適切な瀉血をしたり、刺激の中枢部を蛭に吸わせたりして治療していたのかもしれない。

医者たちは、患者の性的情熱を鎮めるために、実は、とりわけ社会的な環境と心の治療に頼っていた。患者の周囲には、彼に範を示してくれそうな人たちが置いてはならない。執事を確保することが望ましく、女中にすべてやらせることは避けるべきである。欲望に襲われた男女は観劇を避け、なによりも淫らな会話をしないよう注意しなければならないし、墮落した人々とのつき合いからは逃れる必要がある。こうした指導にあたって医師たちは、道徳神学の専門家が発する命令を繰り返しているにすぎない⁹⁶。手淫の誘惑に駆られた若い女性は慈善活動を行うべきだが、そのさい、できるかぎり母親が付きそべきだ⁹⁷という。

ロジエ、ドゥツサン・デュブリユ、デランドは、すべての専門医と同じように、孤独な悪習の恐ろしさを見せるために造られたベルトラン医師の博物館をぜひ訪れるよう勧めている。これを

見れば孤独な悪習に不安を抱いてもらえるかもしれないからである。例えば「死に瀕する手淫常習者の図」⁽⁸⁾など、きわめて有用性が高かった。不正な性的情熱を治す主要な活動と考えられていた知的諸活動を検討するよう仕向けてくれるからである。もちろん、あまりに淫奔な個人は、小説、とりわけ、当時出回っていたなかで最も危険とされていた『新エローズ』(ジャン・ジャック・ルソー著)など読まないようにしなければならない。若い女性は、とくに夜、こうした本を読んではならず、「これらの本によつて引き起こされる動揺により自由に身を任せ」⁽⁹⁾られると感じてこの時間を選んではいけない。

ラングロワ・ド・ロングヴィル医師は読書に没頭する女性と手淫常習者を巧妙に混同している。「私を知るある家族の若い娘さんは、しばらく前から大量の帯下⁽¹⁰⁾に悩まされていた。この症状が不安を与えていたちよどそのころ、私はたまたまその家庭にいた。娘さんはベッドにいた。近づいてゆくと、枕の下から怪しげな冊子がのぞいている。ついてきた母親が隣室に移ったので、その短い時間を利用して、私はその本を素早く手にした。予感は当たっていた。病気の原因を取り除くと、症状は治まった」⁽¹¹⁾。すでに見たように、冷感症の女性を刺激することのできるエロティックなイメージも、快樂にたいして過度に貪欲な人には有害な結果をもたらすのである。

幸いなことに、医者によれば、激しい欲望を緩和できる知的活

動もある。文学史の専門家には顧みられていない側面だが、ここでいさか力説しておく方が良いだろう。過剰に好色な若い女性は研究、ただし入念に練り上げられたプログラムに沿った研究に没頭するべきだという。手淫矯正のための概論は、この線に沿って、エリート層に属する、ということは想像力のトラブルにとりわけ曝されている未婚女性に向けた教育モデルを描いている。彼女たちのために、医者は性欲を抑え、節度をもたらし、爽やかな気分させ、「彼女たちの魂と感覚の沈静化」⁽¹²⁾を可能にする「適切な文学」を推奨する。ロジエは、猥褻な想念やイメージで頭がいっぱいになった女性にたいしては、「本への愛」⁽¹³⁾——とはいえずべての本ではないが——を大いに勧める。とりわけ歴史書、哲学書、倫理学書を集めた蔵書が良い。手淫への欲望に負けそうな女性は、モニュメント史、建築概論、美術館やギャラリーの記述などを読むと良い。ただし、注意が要らないわけではない。というのも、「当然しかるべき図版や頁を抜き取ら」⁽¹⁴⁾なければならぬからである。それは母親の仕事になる。思念を凝らし、知識を詰め込み、省察をもたらし、判断を導き、とりわけ、嵐を遅らせるために情念の方向付けを行うために、「懶惰と官能」⁽¹⁵⁾を退け「高貴と崇高」⁽¹⁶⁾を求めることが肝要である。

良き蔵書には例えばフェヌロンの本その他に、ドリールの詩、ベルナルダン・ド・サン・ピエールの『自然の教育』、ゲスナーの『田園恋愛詩集』、アベ・プレヴォアの推薦する旅行書、ラ・

アルプヤルメルシエやノエルの文学講義、ダンマルタンの『貴婦人用文学随想録』、ランベール侯爵夫人の著作が含まれなければならない。これに教育学概論書が加わる。例えばヨハン・ゲオルク・ツイーマーマンが孤独にかんして綴った教育学概論などがその例だが、この本は、孤独が手淫を促進するだけに有益である。一八三〇年に刊行されたロジエ医師の蔵書は同時代の書物にほとんど場所を与えていない。宗教書にかなするかぎり、著者はきわめて慎重である。たしかに彼は『キリスト教精髓』(シヤトーブリアン著)を推薦しているし、その他にも、ボシユエ、フレシエ、ブルダルー、マシヨンといった十七世紀末の大説教師から若い女性は益を得ることができらる。だが、感覚の支配力が高まるように感じた女性は、法悦の物語、形而上学や哲学の概論、苦行の実践を推奨する著作を注意深く避けなければならない。それらよりも、聖ヴァンサン・ド・ポールの伝記の方が望ましい。

音楽もまた治療に貢献するが、これには注意が必要となる。「懶惰で感傷的な」音楽は「致命的な影響を及ぼす」からである。治療向きともいふべき音楽があつて、それには「気高く、崇高なものもあれば、優雅で生彩に富んだ」ものもある。⁽¹⁶⁾ロジエは音楽についてかなりの頁を割いているが、これは彼が、たとえばラファエル、プッサン、ルドウテといった画家の傑作と同じように音楽に期待をかけていた証左である。想像力によって混乱が生じた若い女性によく勧められるのが素描だが、これは花や風景の絵

とか歴史画や風俗画の模写に限るべきであるとしている。

逆説的なことに、ロジエの好みは科学で、とりわけ鉱物学、植物学、昆虫学を偏愛していたが、そこには動物学、解剖学、生理学は含まれていない。大学の医学部や医学校が、鑑型の陳列室と同様に、女性に門戸を閉ざっていた時代だから無理もあるまい。天文学がポルノグラフィに類出していたことは知られているが、その一方で、植物学はどんなに推奨してもしすぎることはない。植物学は墮落した都会を忘れさせ、田野の空気を深呼吸させ、マナーリ化した日常生活を中断し、「屋外の印象」を増加させ、とりわけ「全感覚を同時に」使わせることによって「印象の秩序」を変容させてくれるからである。植物学のおかげで、食用が刺激される。植物標本の作成と、それに伴う分類は「軽い疲労」を与えてくれる。徒歩で遠出をするおかげで、帰宅後、睡眠が夢に邪魔されることもない。『新エロイズ』に対する嫌悪とカバニスへの依拠がなければ、ロジエのこれらの頁には、言及こそないものの、ルソーの影響が指摘できるだろう。「植物学は女性の好む研究になるはずである」とロジエは結論を述べている。それが無理なばあい、「大きすぎず、また、小さすぎない」庭で植物栽培をしてもよいという。

淫蕩な若い女性はまた作曲、歌謡、詩作、朗読などを試みてもよい。もちろん「針仕事」はいうまでもない——もつとも、まるで指の敏捷さに不信感を抱いているかのように、ロジエはこの針

仕事にほとんどこだわっていない。

とはいえ、若い女性を感覚の奴隷、とりわけ手淫の奴隷から遠ざけるには、まずもって医師の言葉が重要になる。「改心」を引き出したなら医者はずいとも「強い印象を与え⁽¹⁰⁾」なければならぬ、とデランドは言う。と同時に、不能のばあいにはとくに、希望を失わせないようにする必要がある。この点に関するかぎり医者と聴罪司祭とのあいだでは意見の一致を見ている。もともと、デキユレはこの両者に共同戦線を張るように勧めているが。

デランドは、手淫常習者にたいしてかけるべき言葉のこんなモデルを提案している。「三ヶ月後に、あなたはお亡くなりになりますよ。こう言うと、言われた相手はたちまち青ざめ、動揺する。心臓が止まりそうになり、力が抜けて、いまにも卒倒しそうになる」。そこでこう付け加えればよい。「でも、あなたの致命的な習慣を今すぐ完全にやめれば、三ヶ月後には治癒します⁽¹¹⁾」。

節欲、過剰、濫用、不能、冷感症がおよぼす害悪との戦いは、すべて、特に夫婦間の〈良き性交〉を目標としている。夫婦間の〈良き性交〉は、医学が考えるエロティックなものによって定義された深い性的快樂の感光に包まれている。安楽で、規則的で、穏やかな環境において肉体を結合させ、その先で母親になる欲望を満たしてくれるからである。侵犯の感覚によってもたらされる性的快樂の対極にある。「統制された」売春もまた医者によつ

て推奨されており、ある意味で、このモデルをなぞっている。こうした売春は夫婦関係をできるだけ妨害せず、したがって、害悪を最小限にとどめなければならぬ。しかも、すでに見たように、金銭で解決のつく女性は治療において活性剤の役割を果たすことができる。

節欲、過剰、濫用がもたらす、衛生上、社会上の悲惨な結果を回避できるのは、家庭医によつて調整された夫婦の性的交わりだけである。医者たちはさまざまな療法を練り上げてきたが、カピュロン医師が冷静にこうまとめている。夫婦に情熱と活力がありすぎるときには臨床医は夫婦を和らげ、熱が足りないときには刺激できなければならぬ。こうした治療の樂觀論を反映した好例を最後にいくつか挙げてみよう。

妻がリンパ質の夫婦のばあい、異性にたいする敬意も、また家庭の名誉と美德も決して蔑ろにしないのなら、「精神的な刺激」に加えて「交接器官」へ治療を行ったとしてもなんら不当ではない。海水浴、女性の外性器と腰へのローションの塗布、会陰部へのなにもつけない摩擦や塗布剤をつけた摩擦、「芳香化合物による外生殖器の燻蒸、そしてときには通電⁽¹²⁾」などがその治療である。内側から性欲を促進する催淫薬については、ルポーは経験から、それらが男性と女性にたいして違う作用を及ぼすことを認めている。

コロンバ・ド・リゼールは一八四三年、夫婦にたいするさまざま

まな治療法を組み合わせた一覧表を作成している。妻が「性行為に過剰な情熱を見せているばあい、「…」入浴、刺激の少ない食事、清涼飲料水など、穏やかな食餌や生活による療法を勧めると良く、とりわけ一カップあたりスプーン一杯の石灰水を落とした冷たいミルクに効果がある。普段より長い散歩や旅行はとりわけ効果が期待できる」。夫婦の営みには「一定の間を置くか、少なくとも、感覚の快樂に一定の抑制を持ち込むべきである[…:]」その反対のばあい、つまり妻が「…」夫婦の愛撫に冷淡であったり無関心であったりするばあい、田舎の空気、刺激や活力を与える入浴、とりわけ海水浴や、フォルジュ、サンニタルバン、ヴェイシー、エクスニラニシヤベル、バレージユ、エクスニアンニサヴォワの温泉のような鉄分と硫黄分に富んだ温泉がお勧めである。また、しっかりとした食品、黒肉、卵、こくのあるワイン、コア、サレップ〔ある種の洋ランの球根から抽出される粘液〕、セロリ、オレンジ、トリユフ、ヴァニラ、その他興奮性、刺激性の食品からも効果を得ることができる。さらに、完全な無性欲症のばあい、舞踏会や劇場に通ったり、小説など多少なりともエロティックな作品を読んだりすると良い⁽¹⁾。

こうした処方をするにあたって、問診票に慎みのない言葉があれこれ並ぶことは言うまでもない。要するに、医者が女性に——ときには男性にも——性的快樂の享受が少ないのか、多すぎるのか、不十分なのか尋ねることを仮定しているのである。

マンヴィル・ドウ・ポンサンも同様の助言を与えているが、好色の度合いにアンバランスがあるばあいを織り込んでいるため一覧表が複雑になっている。こうなれば、医者がお手上げだと感じることはない。医者は両パートナーの協力を得て治療にあたる必要がある。ときには「ヴェーナスの実践にあまりに意欲的な男性が、性的にあまりに冷淡な女性とかかわりをもつことがある。こういうばあい、女性には香辛料の利いた熱い食べ物、強壯剤、あらゆる種類の刺激物を勧め、その一方で男性には、体温を下げる体を穏やかにするものやミルクなどを摂取させなければならない。この簡単な方法によつて、私はいくども、夫婦が生まれ変わる喜びを味わうところを目にしてきた⁽²⁾」。医者たちの詩的な樂觀主義は、彼らの言によれば、経験に基づいているからだ⁽³⁾が、その経験はおそらく注意深く選別されているに違いない。というのも、この夫婦の微妙な治療法が失敗に終わることはめつたにないからである。

(1) Félix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...*, op. cit., t. 1, p. 405.

(2) *Ibid.*, p. 195.

(3) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme...*, op. cit., p. 522. et le professeur LISFRANC, *Clinique médicale*, t. 2, p. 671.

(4) Jean CIVIALE, *Traité pratique sur les maladies des organes génito-urinaires*, op. cit., t. 2, p. 199.

- (5) Félix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* op. cit., t. 1, p. 410-411.
- (6) Jean CIVIALE, *Traité pratique sur les maladies des organes génito-urinaires*, op. cit., t. 2, p. 199.
- (7) *Ibid.*, p. 200.
- (8) MONDAT, *De la stérilité de l'homme et de la femme...* op. cit., p. 43 et 44.
- (9) *Ibid.*, p. 47.
- (10) *Ibid.*, p. 160 et 161.
- (11) *Ibid.*, p. 67-68.
- (12) *Ibid.*, p. 71 et 72.
- (13) *Ibid.*, p. 73, 74 et 75.
- (14) *Ibid.*, p. 77.
- (15) Armand TROUSSEAU, *Clinique médicale...* op. cit., t. 2, p. 233.
- (16) *Ibid.*, p. 232.
- (17) *Ibid.*, p. 233.
- (18) Félix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* op. cit., t. 1, p. 161.
- (19) MONDAT, *De la stérilité de l'homme et de la femme...* op. cit., p. 97.
- (20) De LIGNAC, *De l'homme et de la femme...* op. cit., t. 1, p. 361.
- (21) VIREY, article «Frigidité», *Dictionnaire des sciences médicales*, op. cit., p. 25.
- (22) MARC, article «Impuissance», *Dictionnaire des sciences médicales*, op. cit., p. 186.
- (23) Ernst WICHMANN, *Dissertation sur la pollution diurne involontaire*, op. cit., p. 113 et 114.
- (24) Antoine SÉLIGNAC, *Des rapprochements sexuels...* thèse citée, p. 46. 「リリキ」の試察のちよふた Game, Virey, Mondat, Rullier, Marc の著作を論文に依拠して云々。
- (25) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique et médicale de la femme...* op. cit., t. 3, p. 301.
- (26) Félix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* op. cit., t. 1, p. 214.
- (27) *Ibid.*, p. 215.
- (28) *Ibid.*, p. 216.
- (29) Cité par Félix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* op. cit., t. 1, p. 208. Marc の著作を論文に依拠して云々。
- (30) *Ibid.*, p. 208.
- (31) Armand TROUSSEAU, *Clinique médicale...* op. cit., t. 2, p. 234.
- (32) J. CAPURON, *Traité des maladies des femmes...* op. cit., p. 260-261.
- (33) Félix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* op. cit., t. 1, p. 199, 209 et 233.
- (34) *Ibid.*, p. 199.
- (35) Ernst WICHMANN, *Dissertation sur la pollution diurne involontaire*, op. cit., p. 90-91.
- (36) Félix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* op. cit., t. 1, p. 217 et 218.
- (37) MARC, article «Impuissance», *Dictionnaire des sciences médicales*, op. cit., 191 et 187.
- (38) Félix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* op. cit., t. 1, p. 209.

- (39) *Ibid.*, p. 234-235.
- (40) *Ibid.*, p. 231.
- (41) MONDAT, *De la stérilité de l'homme et de la femme...* *op. cit.*, p. 58-59.
- (42) *Ibid.*, p. 104-105.
- (43) *Ibid.*, p. 115-116.
- (44) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique et médicale de la femme...* *op. cit.*, t. 2, p. 166.
- (45) Felix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* *op. cit.*, t. 1, p. 203 et 204.
- (46) MARC, article 《Impuissance》, *Dictionnaire des sciences médicales*, *op. cit.*, p. 187.
- (47) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique et médicale de la femme...* *op. cit.*, t. 3, p. 299. ヌノトノシノクニエドクニナクニ同様ノ難治ナリ。 Marc ヲ Capuron ノ著作トシテ云レ。
- (48) *Ibid.*, p. t. 3, p. 299. シノメノロン醫師ガ「無性慾症ハ勃起不全ナルノ病的色精元進ヲ勃起運動ナルヲ来トスルメノシテハ主張トブシテ」。
- (49) Armand TROUSSEAU et H.PIDOUX, *Traité de thérapeutique et de matière médicale*, *op. cit.*, t. 1, p. 817.
- (50) Jean CIVIALE, *Traité pratique sur les maladies des organes génito-urinaires*, *op. cit.*, t. 2, p. 185.
- (51) Felix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* *op. cit.*, t. 1, p. 290.
- (52) *Ibid.*
- (53) *Ibid.*, p. 439.
- (54) *Ibid.*, p. 440.
- (55) *Ibid.*, p. 441-442.
- (56) Felix ROUBAUD ヲナク難治ト。 *ibid.*, p. 223.
- (57) *Ibid.*, p. 423.
- (58) Docteur Amédée Latour dans *Société médicale du Temple*, 3 janvier 1843, cité par Felix ROUBAUD, *ibid.*, p. 427.
- (59) *Ibid.*, p. 262. 同ノ難治ナルヲ云ルニシテ L. A. GANNE, *De l'impuissance et de la stérilité*, thèse citée, p. 49.
- (60) VIREY, article 《Frigidité》, *Dictionnaire des sciences médicales*, *op. cit.*, p. 25.
- (61) MARC, article 《Impuissance》, *Dictionnaire des sciences médicales*, *op. cit.*, p. 186.
- (62) *Ibid.*, p. 187.
- (63) Felix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* *op. cit.*, t. 2, p. 529.
- (64) Jean CIVIALE, *Traité pratique sur les maladies des organes génito-urinaires*, *op. cit.*, t. 2, p. 217.
- (65) ヲリカキドノ記載トクニシテナリシヲシテ cf Docteur ROZIER, *Des habitudes secrètes...* *op. cit.*, *passim*.
- (66) Felix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance...* *op. cit.*, t. 2, p. 559.
- (67) Docteur ROZIER, *Des habitudes secrètes...* *op. cit.*, p. 232. 藥ハ用メ同箇所。
- (68) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme...* *op. cit.*, p. 534.
- (69) J.-L. DOUSSIN-DUBREUIL, *Lettres sur les dangers de l'onanisme et conseils relatifs au traitement des maladies qui résultent*, *op. cit.*, p. 183.
- (70) *Ibid.*, p. 184.

- (71) *Ibid.*, p. 184-185. 続へ引用へ同箇所。
- (72) *Ibid.*, p. 186. 続へ箇所にかゝつては Franz X. EDER, «Discourse and sexual desire: German language discourse on masturbation in the late 18th century», *Journal of the history of sexuality*, vol. 13, n° 4, oct. 2004.
- (73) *Ibid.*, p. 34. 精液漏にかゝる注意にこゝつては右記参照。ただし、引用したのは、手淫と戦つたための強制のケースでもある。
- (74) *Ibid.*, p. 35 et 36.
- (75) Docteur ROZIER, *Des habitudes secrètes...*, *op. cit.*, p. 292-293 et docteur SIMON, *Traité d'hygiène appliquée à l'éducation de la jeunesse*, cité par Jean STENGERS et Anne VAN NECK, *Histoire d'une grande peur : la masturbation*, Paris, Les Empêcheurs de Penser en Rond, 1998, p. 22.
- (76) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme...*, *op. cit.*, p. 536. 1)1)キレの引用をその続へて引用へ同箇所。
- (77) Cité par Léop. DESLANDES, *De l'onanisme...*, *op. cit.*, p. 536.
- (78) Jean CIVIALE, *Traité pratique sur les maladies des organes genito-urinaires*, *op. cit.*, t. 2, p. 215. et RASPAIL, *Manuel annuaire de la santé ou Médecine et pharmacie domestiques*, Paris, 1845, p. 211-212, cité par Jean STENGERS et Anne VAN NECK, *Histoire d'une grande peur...*, *op. cit.*, p. 16.
- (79) Claude François LALLEMAND, *Des pertes séminales...*, *op. cit.*, t. III, p. 282-283.
- (80) *Ibid.*, t. I, p. 続へて用ひては 418, 419 et 420.
- (81) *Ibid.*, t. III, p. 500.
- (82) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme...*, *op. cit.*, p. 267.
- (83) MONDAT, *De la stérilité de l'homme et de la femme...*, *op. cit.*, p. 121. 1)1)大抵は、De l'impuissance et de la stérilité (p. 47), thèse de L. A. GANNE soutenue en 1837. 2)治療として挙げられたもの。ヘギリスの医師と社会の不安にこゝつては Ornella MOSCUCCI, «Clitoridectomy, circumcision and the politics of sexual pleasure in Mid-victorian Britain», dans Andrew H. MILLER et James Eli ADASMS, *Sexualities in Victorian Britain*, Bloomington, Indiana University Press, 1996. 1)の論文は、一八五〇年代と六〇年代を扱つており、クリトリス切除と衛生の表象と性的な拘束のあいだに生じた関係を明らかにしてゐる。フランセスは1)の1)が本邦の意味で議論の祖上に乗せられるのは、一八六四年一月十三日に開催されたパリ外科学会でリシエが、良家の若い女性手淫常習者をクリトリス切除にせよといふ一時的に治療した方法を發表してつかふことによつて知られる (cf. Jean STENGERS et Anne VAN NECK, *Histoire d'une grande peur...*, *op. cit.*, p. 14.)°
- (84) Cf. *supra*, p. 48.
- (85) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme...*, *op. cit.*, p. 450 et 452. Deslandes は le docteur SIMON DE METS, *Hygiène de la jeunesse*, 1827, p. 174. を引いてゐる。
- (86) Docteur ROZIER, *Des habitudes secrètes...*, *op. cit.*, p. 220. Rozier 医師の1)1)は、偉大な衛生学者 Halle の影響を受けたものである。
- (87) *Ibid.*, p. 221.
- (88) Claude François LALLEMAND, *Des pertes séminales...*, *op. cit.*, t. III, p. 367-368 et Jean STENGERS et Anne VAN NECK, *Histoire*

- d'une grande peur*... *op. cit.*, p. 20.
- (82) J. CAPURON, *Traité des maladies des femmes*... *op. cit.*, p. 260.
- (83) L. A. CHALINE, *Du traitement de la nymphomanie*... thèse, Paris, 1842, n° 142, p. 8. Léop. DESLANDES, *De l'onanisme*... *op. cit.*, p. 552.
- (84) Docteur ROZIER, *Des habitudes secrètes*... *op. cit.*, p. 217.
- (85) S.N.P. LANGLOIS DE LONGUEVILLE, *Education physique et morale de la jeune fille*, thèse citée, p. 28. Friedlander, le docteur Crommelick, Auguste Debay の翻訳による Jean STENGERS et Anne VAN NECK, *Histoire d'une grande peur*... *op. cit.*, p. 19 et 21.
- (86) Docteur ROZIER, *Des habitudes secrètes*... *op. cit.*, p. 253.
- (87) 本邦の譯本は、Capuron, Mondat, Rozier, Marc, Rullier, Lignac の著作からの引用。
- (88) Jean CIVIALE, *Traité pratique sur les maladies des organes génito-urinaires*, *op. cit.*, t. 2, p. 183.
- (89) Cf. *infra*, p. 306-308.
- (90) Docteur ROZIER, *Des habitudes secrètes*... *op. cit.*, p. 280.
- (91) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme*... *op. cit.*, p. 531.
- (92) S.N.P. LANGLOIS DE LONGUEVILLE, *Education physique et morale de la jeune fille*, thèse citée, p. 35.
- (93) *Ibid.*, p. 35-36.
- (94) Docteur ROZIER, *Des habitudes secrètes*... *op. cit.*, p. 256.
- (95) *Ibid.*, p. 368. 本邦の譯本は、Léop. DESLANDES, *De l'onanisme*... *op. cit.*, p. 256 sq.
- (96) *Ibid.*, p. 265 et 266.
- (97) *Ibid.*, p. 237.
- (98) *Ibid.*, p. 237, 238 et 242.
- (99) *Ibid.*, p. 246 et 247.
- (100) *Ibid.*, p. 249.
- (101) Léop. DESLANDES, *De l'onanisme*... *op. cit.*, p. 529.
- (102) *Idem*.
- (103) Felix ROUBAUD, *Traité de l'impuissance*... *op. cit.*, t. 2, p. 528.
- (104) Cf. COLOMBAT DE LISÈRE, *Traité complet des maladies des femmes*... *op. cit.*, t. 3, p. 1133.
- (105) Charles MENVILLE DE PONSAN, *Histoire philosophique et médicale de la femme*... *op. cit.*, t. 2, p. 166.